國學院大學學術情報リポジトリ

伝西行筆『源氏物語』竹河に見られる語法小考

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 竹部, 歩美 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000941

伝西行筆『源氏物語』竹河に見られる語法小考

竹部 歩美

キーワード…源氏物語 中古語 中世語 規範的文法 言

語意識

はじめに

『源氏物語』の写本を読むとき、その写本に、中古(平安時代)語とは思われないような語法を目にすることがある。^①本稿は、天理大学附属天理図書館蔵本(以下、天理本)と、静嘉堂文庫蔵本(以下、静嘉堂本)の伝西行筆『源氏物語』竹河に、中古の標準的語法から逸脱するところがあることや読解に難の生ずる箇所のあるところがあることについて報告しようとするものである。

現在冊子等として刊行され閲覧し得る『源氏物語』竹河の写本には、西行(一一一八〜一一九〇年)^②の筆であると伝わる、天理本と静嘉堂本の二つがある。この二つはともに伝西行筆とされながら、その筆跡は同一人物に拠るとは到底思われないほどに異なっており、本文には異同も多々ある。さらに、この二つ写本の本文の整訂を試みて、中古の和文として読解しようとする、中古の語法とは思われない箇所や読解に難の生ずる箇所が見られる。そこで本稿は、二つの伝西行筆『源氏物語』竹河において語法に疑義の生ずるところを例示しつつ考察する。

天理本のテキストには天理大学出版部(一九七八)を使用し、静嘉堂本のテキストには財団法人静嘉堂(一九八〇)

を使用する。静嘉堂本の丁数は本文の開始部分を一丁表として私に付した。用例は校訂しつつ、影印の元の状態がわかるように示す。影印の改行箇所は／で、判読不能箇所は□で示し、本文にない文字等は（ ）に示す。また、『源氏物語大成校異篇』本文（以下、『大成』。なお、竹河の底本は大島本）と適宜比較する。

一・天理本と静嘉堂本

天理本は大島雅太郎氏旧蔵本であり、『大成』には「大」の記号が付されて別本系の写本として収録されている。また、『源氏物語別本集成第十一卷』（以下、『別本集成』）にも収録されている。天理本は本文行数が十行の五十丁から成るが、二九丁と三〇丁の間・三七丁と三八丁の間・四三丁と四四丁の間の三か所には落丁がある。³また、一五丁表裏、四九丁表く五〇丁裏は別筆で補われている。テキストの解題⁴に拠れば、ここは「本帖装幀の際にすでに」「欠落していたら」しいとされている。そのため、この部分については本稿では考察対象から除外する。書写年代について、テキストの解題では、天理本は鎌倉時代とされ、『源氏物語

大成 研究資料篇』の解説「大島氏舊藏傳西行筆竹河卷」では「書寫年代は鎌倉初期をくだるまい」とされている。

静嘉堂本は青木信寅氏旧蔵本であり、『大成』に「西」の記号で別本系として収録されている。『別本集成』には収録されていない。静嘉堂本は本文行数が十二行の四十丁から成る。⁶テキストとしたマイクロフィルムでは、一七丁裏十二行目の一部が画像不鮮明のため判読不能である。静嘉堂本の書写年代については『源氏物語大成 研究資料篇』の解説「伝西行筆宿木斷簡」において、「河内本成立以後に書かれたものではない」とされている。

これらに従って、この二つの伝西行筆の竹河の書写年代が鎌倉時代初期く中期であるとした場合、二つは、『源氏物語』写本のなかでも古いものに属することになる。⁸

先述のとおり、天理本と静嘉堂本とは『大成』に収録されているが、静嘉堂本は『別本集成』に収録されていない。よって、天理本については『別本集成』に拠って現行の平仮名漢字交じりによる表記の本文を復元することが可能である。しかし、静嘉堂本については、『大成』の異同に拠っては原本の本文を復元することはできない。⁹具体例を挙げ

てみたい。当該箇所に出現する語が同一概念であるとき、『大成』では異同としては扱われない。例えば、次の箇所では、形容詞イカメシとは異なる形容詞イマメカシが天理本にあることが異同として『大成』には示される。しかし、静嘉堂本ではイカメシが音便形で現れていることは『大成』には異同としては示されない。また、名詞イキホヒの仮名遣いが『大成』・天理本・静嘉堂本で異なることは『大成』からは知り得ないのである。

○いきおひいかめしくおはせし〈大成、一四六三⑨〉

○いきほひいまめかしくをはせし〈天理本、一ウ⑦〉

○いきをひいかめしうおはせし〈静嘉堂本、一ウ④〉

また、異同があるにもかかわらず『大成』にはそれが記録されていない場合もある。次の用例では、傍線部の異同があることは『大成』に記録されていない。これらには解釈に関わる場合もあるにもかかわらずである。

○しつまりたるをそこ、かしこのわかき人とも

〈大成、一四六七⑤〉

○しつまりたまへるをそ、こかしこのわか／うと、も

〈天理本、七オ④〉

○雲のうへちかくてはさしもみえざりき

〈大成、一四九〇⑭〉

○く／ものうゑちかくてさしもみえ給ざりき

〈静嘉堂本、二九ウ⑤〉

○うちいですくす事もこそ侍れ〈大成、一四九一⑧〉

○うちいです、こす事も／こそはへれ

〈静嘉堂本、三〇オ⑥〉

このように、『大成』の異同には不確かな点があるので、殊に『別本集成』に収録されていない静嘉堂本については、写本にあたって本文を確認する必要がある。

そこで、天理本と静嘉堂本を改めて翻刻し、本文の整訂を試みると、それぞれにそれぞれの語法に疑義の生ずるところが見出されるのである。そして、その問題点は、語法の史的变化が要因で生じたと思われるものと、それ以外ものにと大別される。以下、それらを例示していく。

二、語法の史的变化に起因すると思われる点

天理本と静嘉堂本は、『源氏物語』写本群のなかでも古いものと目されているとはいえ、その書写年代は鎌倉時代で

ある。そのためであろう、この二つの写本には、中古（平安時代）の文法規範から外れていると思われるところが複数見られる。また、『大成』をテキストとして『源氏物語』を読む場合には多くは見られない語が見られることがある。

二・一・規範から逸脱する語法

まず、中古の文法規範から外れる箇所を挙げる。

二・一・一・格助詞

主格用法の格助詞ノは、従属節内の主格を表すとされる。しかし、天理本と静嘉堂本には、次のように、格助詞ノの主節の主格用法と考えられる例が見られる。

○右（の）大／殿いとのの、六人ながらひき連れておはしたり。
〈天理本、七オ⑩〉

○右の大おと臣（ニ夕霧）も、御子ども六人ながらひき連れておはしたり。
〈大成、一四六七⑧〉

○故殿こおはせましかば、／ここなる人々ひとの、かかるすまひごとまひにぞ、心は見／えまし。」

〈静嘉堂本、四〇オ⑫〉

○（玉鬘）「故殿と（ニ鬘黒）おはせましかば、ここなる人々も、かかるすさびごと事にぞ、心は乱みだらまし。」

〈大成、一五〇一③〉

格助詞へは離れてゆく意を含んだ移動を表す動詞とともに用いるとされる（小田二〇一五）。しかし、次の静嘉堂本の用例では動詞キコユとともに用いられている。

○弁の君して、心うつくしきやうに大臣おとへ聞きこえた給ま

（ふ）。〈静嘉堂本、三二オ⑫〉

○弁の君して、心うつくしきやうに大臣おとに聞きこえた給ま

（ふ）。〈大成、一四九三⑫〉

二・一・二・係助詞と係り結び

天理本と静嘉堂本では、係り結びが正確に行われているところもある一方で、次のように規範から外れるところもある。

○院よりの／たまはするこそ、ほのめかしきこえた

まふ。〈天理本、八ウ③④〉

○めづらかなるまで、／いとことにもてなし思おほいたる

一 已然形の係り結びによる逆接表現であつて、当該箇所は、過去の助動詞キ＋接続助詞ガではなく、過去の助動詞キの已然形シカである可能性もあろうかとも考えられる。⁽¹⁰⁾

○さるは、おり立ちて、／人のやうにわびたま給(は)

ざりしが、人さまの、さすがに／心苦しくく見ゆるこ

とも、…(静嘉堂本、三〇オ⑤)

○さるは、おり立ちて人のやうにもわびたま給はざりしかど、人さまの、さすがに心苦しくく見ゆるなり。

〈大成、一四九一⑧〉

二・一・四・敬語

次の用例は、故鬚黒が生前娘の婚姻について方針を決めていたという内容を踏まえての玉鬘の心内文である。すると、静嘉堂本の用例は、「事前に決めている」の意の動詞思ヒ掟ツの尊敬語形思シ掟ツであると考えられるため、ここは二重敬語の例であると考えられる。一方で、思ヒ置クの尊敬語思シ置クと書写者が捉えているとも推測されるが、その場合、これに助詞テ＋尊敬語の本動詞タマフが続くと考えることとなるため、その解釈が疑問となる。

○「この御ま参まりを、さまたげやうに思(ふ)らんはしも、／めざましき事ことに限りなきことも、ただ人に／かけてもあるまじき事ことに、故殿この思おしおきてたま給(ひ)しものを。」(静嘉堂本、二二ウ④⑤)

○(玉鬘の心内)「この御ま参まりを、さまたげやうに思ふらんはしも、めざましき事こと、限りなきにても、ただ人物にはかけてあるまじき物ものに、故殿ことの思おしおたりし物ものを。」(大成、一四八三④)

このように、天理本と静嘉堂本には、中古の標準的な文法に抵触すると思われるところがある。

二・二・中古語としては稀な語彙語法

天理本と静嘉堂本には、『大成』をテキストとして読む場合には多くは見られない、中古以降の語彙語法と思われるものが見られる。

二・二・一・助動詞ムズ

天理本には、推量の助動詞ムズが1例見られる。助動詞ムズは平安時代から用例が見られるが、『源氏物語』での用

例は多くはないため、天理本に用例のあることが注目される。当該箇所に対応する『大成』本文では「むとす」である。なお、当該箇所をムズとするのは『大成』と『別本集成』に拠れば、天理本のみである。

○「中宮をはばかりきこえたまふと／＼て、院の女御をば、いかがはしたてまつりたま／＼はんずる。」

〈天理本、三五才⑩〉

○（玉鬘の息子たち）「中宮をはばかりきこえたま（ふ）とて、院の女御をばいかがしたてまつりたまはむとする。」〈大成、一四八八⑧〉

助動詞ムズは、中古よりも中世に盛んに用いられるとされる。吉田（一九六二）に拠れば、中古の助動詞ムズは地の文には現れず、中世になると地の文にも現れるとされる。『源氏物語』中のムズについて、築島（一九七四）は、その本文に「疑いを存する」とし、「源氏物語には「むず」は忌避されていたことは確かである」としている。『源氏物語彙用例総索引付属語篇』（以下、『索引』）に拠ると助動詞ムズは3例あるが、その3例すべてに異同がある。なお、天理本の用例は男性の発話文の用例であるが、『大成』の用

例は、いずれも、女性による発話文・心内文である。

○（右近）「いかに世に侍らんずらん。」

〈大成、夕顔、一四〇⑪〉

○（近江君）「いつか女御殿には参りはべらんずる。」

〈大成、常夏、八四六③〉

○（浮舟心内）「いつか見んずる。」

〈大成、手習、二〇二五⑨〉

二・二・二・形容詞に冠する接頭辞「御」

形容詞や形容動詞に敬語接頭語「御」を冠して尊敬の意を表す用法は鎌倉時代以降に発達するものであり中古では稀であるとされる（中村・大久保・碁石二〇〇二）。「御＋形容詞・形容動詞」の例は『大成』にも13例あるが、「御＋形容詞」の例（7例）はすべて「御＋形容詞連体形＋名詞」の形式であって、概ね、「形容詞連体形＋〔御＋名詞〕」、つまり、形容詞連体形の連体修飾と同意である。

さて、天理本には形容詞が敬語接頭辞「御」を関する例が2例あり、2例とも形容詞が連体形で直下の名詞を修飾している。静嘉堂本には「御＋形容詞」の例はない。2例

のうち1例は、『大成』本文においても「御+形容詞」である。また、天理本の「御古き」の例について、ここに「御」が現れるのは『大成』『別本集成』に拠れば天理本のみである。

○尚侍の君の御近／きゆかり、そこらこそは世に広／りたま／へれど、〈天理本、二オ①〉

○尚侍の君の御近きゆかり、そこらこそは世に広／りたまへど、〈大成、一四六三⑪⑫〉

○大方の有様ひきかへたるやうに、殿のうち／しめやかに、ゆかり、そこらこそは世に満ち広／りたまへれど、〈静嘉堂本、一ウ⑧〉

○朱雀院の御古き心ものしたまふ人々／は、六条院、御方ざまも、方々につけて、な／ほ、かの入道の宮をばえ避かず、参り／たまふなめり。

〈天理本、九ウ⑤〉

○朱雀院の古き心ものしたまふ人々、六条院のかたさまのもの、方々につけて、なほかの入道の宮をばえ避かず参りたまふなめり。

〈大成、一四六九②〉

○朱／雀院の古きところをしたまふ人々、六条／院の方さまのもの、方々につけて、なほ、かの／入道の宮をばよにらず、参りたまふなめり。

〈静嘉堂本、七オ⑦〉

二・二・三、敬語動詞オハシマサフ

尊敬語の動詞オハシマサフは中古に成立した語とされ、宇津保物語、大鏡に10例程度、源氏物語・栄花物語に2、3例みられるという(『古語大辞典』小学館)。「日本古典文学大系本文データベース」の横断検索では宇津保物語10例、枕草子2例、栄花物語3例、大鏡11例が確認できるものの、『源氏物語』にはその用例がない。『索引』に拠っても用例は見られない。その、オハシマサフが、天理本に見られる。

○「幼うおはしまさひしとき、…」

〈天理本、一九オ③〉

○「玉鬘の二人の娘が」
幼くおはしまししとき、
… 〈大成、一四七五⑬〉

二・二・四・その他の語

天理本と静嘉堂本には、中古語ではないと思われる語が見られることがある。

次の用例は、玉鬘が女房たちの行為を、あつかましい、恥ずべきだ、と非難しているところである。静嘉堂本に見える形容動詞オモナゲナリには「恥知らずなさま」の意があるので文意には合うものの、オモナゲナリの初出は『日本国語大辞典 第二版』（小学館。以下、『日国』）に拠れば十八世紀の浄瑠璃である。

○「うたての君たちや。はづかしげ／なるまめ人をさへ、よくこそおもなげな／れ。」（静嘉堂本、八ウ⑥）

○「うたての御たちや。恥づかしげなるまめ人をさへ、よくこそおもなけれ。」（大成、一四七〇⑧）

次の用例は、玉鬘の娘（大君）の隅々まで行き届いた姿の美しさが述べられるところである。形容詞ヤウヤウシは「もったいぶっている」の意であり、かつ、『日国』では初出は『無名抄』（一二二一年）とされている。

○桜の細長、／山吹など、折に合ひたる色あひなつかしき、／重なりたる裾まで、愛敬こぼれ落ち

／たるやうに見ゆるをり、やうやうしく心うつくし
／きけさへ添ひたまへり。（静嘉堂本、一二三オ⑤）
○桜の細長、山吹などの折に合ひたる色あひの、
なつかしきほどに重なりたる裾まで、愛敬のこ
ぼれ落ちたるやうに見ゆる、御もてなしなども、ら
うらうじく心恥づかしきけさへ添ひたまへり。

（大成、一四七四⑫）

次の用例は、大君と中君の碁を打つ姿を覗き見る場面である。『大成』に見られる名詞マギレは物事を行なう機会の意味であるが、天理本のマギレモノは『日国』に拠ればその初出は十七世紀の『仮名草子』であり、その意味は、まぎらわしいこと、見分けにくいことであって、次例の文意に合わない。

○「またかかるまぎれものや。」（天理本、二二二オ⑩）
○（藏人少将）「またかかるまぎれもや。」

（大成、一四七八⑤）

このように、天理本と静嘉堂本には、中古の文法規範から逸脱するところが見られる。また、中古語では用例のあまり多くは見られない、中古以降の語法かと思われるもの

がある。『源氏物語』の写本の書写年代は鎌倉時代を遡ることはない。よって、本節で挙げたものは、書き損じの可能性は否定できないものの、語法の史的变化後のに起因する文法規範からの逸脱例であり、当時の言語意識の混入である可能性があると考えるのである。

三 語法の史的变化以外に要因があると思われる点

写本の多くには、テキストの書写者による不注意——例えば書き損じや、不十分な語法への配慮、文脈や内容の取り違えなどによって生じたと推測される、テキストの不備が見られることがある⁽¹⁾。天理本と静嘉堂本にもそうした点が散見される。

三 一 誤字・脱字・衍字によるもの

次の用例には脱字と衍字があり、単語や文として成立しない。

○おとなおとなき／さましてついでたまへれば、

〈天理本、一八才④〉

○おとなおとなしきさましてついでたまへば、

〈大成、一四七五⑤〉
○「『いしにを』と言ひし／さまにはあらず。」
〈静嘉堂本、二一才⑨〉
○「『生き死にを。』と言ひしさまの：」
〈大成、一四八二⑭〉
○「近うてもみましかば。」と〈天理本、四八ウ③〉
○「近うも見ましかば。」と〈大成、一四九九⑬〉
次の用例には類名の混同（中村一九五四・竹部二〇一五）が起こっていると考えられるものである。天理本の用例は、「久（く）」と「宇（う）」と崩し字形が類似することから、類名の仮名を混同したことに起因する誤字であると考えられる。静嘉堂本の用例は「出家してしまおう」という文脈であるから「てむ（助動詞ツ＋助動詞ム）」が期待されるところであって、テモでは文意が成り立たない。この用例について、竹部（二〇一九）は、静嘉堂本の当該箇所には「ても」とあり、その「も」は明らかに現行のひらがなに見得る字形であるが、字母「无」がム・モ・ンを表し得ることに照らすと、静嘉堂本は、親本の「てん」の「ん」を「无」と見て、ここを「も」としたのであろうと推測さ

れるとしてゐる。

○「まめ人とこそはつけられたりけれ。いとうし／た
る名かな。」〈天理本、一一ウ④〉

○「まめ人とこそつけられたりけれ。いと屈じたる名
かな。」〈大成、一四七〇⑥〉

○前の尚侍の君、「かたちを変へ／ても。」と思し立つ
を、〈静嘉堂本、三三才④〉

○前の尚侍の君、「かたちを変へてん。」と思し立つを、

〈大成、一四九四⑥〉

次の用例の二重傍線部は、天理本には「つみ可」とあり、「尔(に)」と「可(か)」の混同が起こり、傍線部の「うかへ」では脱字が起こっているようである。

○「避かぬ。」など／のたまはするは、愚かなるつ

みかうかへ／させたまふぞや。」〈天理本、四五ウ⑧〉

○(薰)「避きぬ」などのたまはするは、愚かなる
罪にうちかへさせたま(ふ)にや。」

〈大成、一四九八①〉

ただし、これらの用例のなかには誤字が生じる要因が推定できないものもある。

○いとちくはに幼かるべきほどよりは

〈静嘉堂本、四才⑪〉

○いときびはに幼かるべきほどよりは

〈大成、一四六六⑤〉

三・三・二. 文意に合致しない語法

さらに、天理本と静嘉堂本には、その一部分を見る限りは文法には抵触してはいないものの、『源氏物語』の文脈・内容には合致しないところがある。

次の用例は、協力しあうことに同意したとしてもその同意が今後も続くはずがないという、逆接的な意で関連しあっている箇所である。よって、静嘉堂本のように順接のバでは文意が成り立たない。

○「後／見や、何や。」と、かねて思ししかば、いと

もさし／もえ侍らじ。」〈静嘉堂本、二七才⑤〉

○(玉鬘の子息たち)「後／見や、何や。」と、かねて思
しかはすとも、さしもえ侍らじ。」

〈大成、一四八八⑨〉

次の用例は、宮中で冷遇されてはわが子が気の毒だとい

う内容であるから、静嘉堂本のように助動詞ズ＋接続助詞ハでは文意が成立しない。

○ 上の御心は／浅からねど、年経てさぶらひたま（ふ）御方々、よろ／しからず思ひ離れたまはずは、苦しうもあ／りぬべき。」〈静嘉堂本、三一ウ⑨〉

○（玉鬘）「上（＝冷泉院）の御心はへは浅からねど、年経てさぶらひたま（ふ）御方々、よろしからず思ひはなちたまはば、（わが子（大君）は）苦しうもあるべきかな。」〈大成、一四九三③〉

次の静嘉堂本の用例は、言わなくてもよいことを話さずしては困るといふ文意であつてほしいところである。天理本の用例では冷泉院は退位して花やかではない暮らしになつたといふ主旨であるはずのところである。しかし、この二例には傍線部のように助動詞ズがあつて打ち消されている。

○ 「うち出でず過すごすことも／こそ侍れ。あなかしこ。」〈静嘉堂本、三〇オ⑥〉

○（薰）「うち出で過すぐすこともこそ侍れ。あなかしこ。」〈大成、一四九一⑧〉

○ 「位を去りて、のどかにおはしまし、何／事もけざやかならぬ御有様なら／ずなりにたるに、…」
〈天理本、四七オ⑦〉

○（薰）「冷泉院は）位を去りて静かにおはしまし、何事もけざやかならぬ御有様となりたるに、…」
「大成、一四九九①」

次の用例は玉鬘の娘の参内を玉鬘の子息たちが反対する場面である。発話文内の心内文は玉鬘の子息の左近中将によるものである。よつて静嘉堂本にある尊敬語動詞「思し」では自敬表現となるため、不審である。

○ 「御けしきよろし／からず。』さればこそ、かつもこちらかたぶきぬべ／きことなれ。』と、かねて思ししことを…」〈静嘉堂、二二ハオ⑨〉

○（左近中将）「帝の御けしきよろしからず。さればこそ、『世人の心のうちもかたぶきぬべきことなり。』とかねて（私があたな（＝母玉鬘）に）申（し）しことを…」〈大成、一四八七⑫〉

次の用例は「皆が私（玉鬘）に言う」というところである。よつて、静嘉堂本のように謙讓語キコユがあると自敬

表現となり、敬語運用としては不適切である。

○「誰も、／便なかるべきことは、ありのままにいさめきこ／えたまはで、今、ひきかへし、右の大臣もひがひが／しきやうにおほむけてのたま(は)すめれば、…」〈静嘉堂本、二二六ウ⑦⑧〉

○(玉鬘)「誰も誰も、便なからむことは、ありのままにもいさめたまはで、今ひき返し、右の大臣(ハタ霧)も、ひがひがしきやうにおもむけてのたまふなれば、…」〈大成、一四八八④〉

次の用例では、自卑敬語の下二段動詞タマフルであるべきところに、尊敬語の四段動詞タマフとある。

○「よろ／など、心にはいとしも思ひたまはねど、まづ御／覽ぜられにこそ、参りはべれ。」

〈天理本、四五ウ⑥〉

○(薰)「よろこびなどは、(私は)心にはいとしも思(ひ)たまへねども、まづ御覽ぜられにこそ参りはべれ。」〈大成、一四九七④〉

○「院よりいとわりなくのたまはするに、／思(ひ)たまひ乱りてなん。」〈静嘉堂本、一八ウ①〉

○(玉鬘の文)「院より(娘を院へ参上させるよう)わりなくのたまはするに、(私は)思ふたまへ乱れてなん。」〈大成、一四八〇①〉

次の用例は丁寧語ハベリの出現位置に疑義がある。ここは、冷泉院が出産後の大君のもとに通うことに女房が不満をもちるところであり、「ただならず言」うのは女房である。本文を読解していくと、天理本の用例中のハベリを含む一文は発話文の外にあると考えられるので、ハベリの用法に合致しない。たしかに、「言ひはべり」までが発話文である可能性もある。ただし、そうすると「言ひはべり」で会話文終えたあと、直ちに別の地の文が連なることになるため、文・文章の連続のしかたとしては不自然ではないかという疑問が新たに生ずるのである。

○女一の宮、一所おはしますに、いとめづらしくう

つく／しうおはすれば、いとみじう思したり。／いとど、ただ、こなたにのみおはします。女御／方の人々、「かからでありぬべき世(の)中かな。」

ことただならず言ひはべり。〈天理本、四〇オ⑩〉

○女一(の)宮、一所おはしますに、いとめづらしく

うつくしうておはすれば、(冷泉院は) といみじう
思^{おほ}したり。いとど、ただ、こなたにのみおはします。
女^{がた}御方の人々、(女房)「いとからでありぬべき世
かな。」と、ただならず言^いひ思^いへり。

〈大成、一四九二⑫〉

このように、天理本と静嘉堂本には誤字・脱字・衍字・
仮名の混同が生じたためにテキストとして成立せず、読解
するにあたり疑義の生ずるところが散見される。また、天
理本と静嘉堂本には、文法的には誤りではないものの、『大
成』本文と比較する限り、文脈に合致しないと考えざるを
得ないところも散見される。

おわりに

以上、天理本と静嘉堂本の語彙語法上の問題点を挙げ考
察してきた。本稿で述べたことをまとめると次のようにな
る。

一、『源氏物語』写本の一つである天理本と静嘉堂本には、
語法の史的变化に起因すると推測される、中古(平安時
代)の文法規範に逸脱する箇所が散見される。

二、天理本と静嘉堂本には、『大成』本文では見ることの稀
な、中古語としては稀な語彙語法や中古語ではなく後世
の語法ではないかと思われる用例が見られる。

三、天理本と静嘉堂本には、誤字・脱字・衍字・仮名の混
同のため、テキストとして成立せず、読解するにあたり
疑義の生ずるところが見られる。

四、天理本と静嘉堂本には、文法的には誤りではないが文
脈に合致しないと思われるところが見られる。

付言すれば、『源氏物語』写本には、写本でありながら、
中古の言語意識が希薄になり、中古以降の言語意識が混入
する場合があることを本稿では言い得たと考える。ただ
し、本稿では、天理本と静嘉堂本にこういった点があるこ
とを例示するにとどまっている。天理本と静嘉堂本の本文
の異同の程度やその親疎関係、ならびに、他の写本との異
同や親疎関係を、考え合わせるべき課題である。すべて、
今後の課題である。

注

- (1) これについて、本稿筆者は竹部(二〇一五・二〇一六・二〇一八b)で述べたことがある。
- (2) 上田・西澤・平山・三浦(二〇〇一)。
- (3) 次の三か所である。なお、四三丁と四四丁の間に落丁のあることは天理本の解題に記されていない。
- ・二九丁と三〇丁の間：『大成』一四八四①⑩(いとおしみ給おと、も御ふみありもてまいりてみればひめ君ふたところ)
- ・三七丁と三八丁の間：『大成』一四九〇④⑭(いかに見たまふらむとのみく雲のうへちかくては)
- ・四三丁と四四丁の間：『大成』一四九五⑤①④(ことはり也とうちかたらひ給てあはれにのみく心もとなきやうなりしかとめやすくねひまさりぬへかめり)。
- 天理本には右の点線部に欠落があることがあってか、静嘉堂本に比べてテキストの量が少ない。テキストを学校文法の十品詞で単語に分けたとき、天理本には約7700語(このうち補筆とされる箇所の数約450語)、静嘉堂本は約8300語であって、天理本は約600語少ない。
- (4) 天理本の解題。曾澤太吉執筆。
- (5) 財団法人静嘉堂編(一九八四)に拠る。
- (6) 四〇丁裏までの本文の後、五〇丁表に相当する箇所に、この写本が西行真筆である旨を了佐十四代古筆了仲が記すとする奥付がある。真偽は不明である。
- (7) 『大成』一四七九⑧(まめやかにきこえ給さるへきにこそはおはすらめ)相当箇所。
- (8) もちろん、書写年代の古さがテキストの善し悪しや自筆原典に近いといったことを裏付けるのではない。
- (9) このことは、夙に知られているところであり、伊藤(二〇〇一・二〇〇二)、中川(二〇一五)によって指摘されている。
- (10) 第三節に見るように書写の際の不注意の例のあることを踏まえれば、接続助詞下の書き落しとの可能性もある。
- (11) 上田ほか共編(一九九四)。ところで吉田(一九六二)に拠ればムズは源氏物語に17例あるという。しかし、『索引』に拠れば、ムズは3例であり、ムズ(『索引』では「ウス」)を語構成要素とする(この点、異論もある(古語大辞典(小学館)「オハサウスル」が7例である)。
- (12) 国文学研究資料館電子資料(<http://basel.nijl.ac.jp/~nkbtb/>)

(13) 『大成』では、当該箇所¹³の異同として、三条西家本と保坂

本に「おはしまさうし」とあるとされる。三条西家本には二本あるが、日本大学蔵本(『日本大学蔵 源氏物語』八木書店)に「於八しま佐うし時」(一八オ⑤)とある。宮内庁本(宮内庁書陵部蔵 原色版青表紙本『源氏物語』新典社)は「お八しまし志時」(三七頁⑤⑥)とある。保坂本には「お八万さ日し」(二五オ⑥)とある。大島本には「於ハしまさうし」とあり、見せ消ちとなっている。

(14) これらが生じる要因として、その可能性はいくつか考えられる。第一に、書写者の、テキストに対する配慮が不十分であった可能性である。本稿が例示したように、中世の語法の紛れ込みや、誤字脱字などがあることなどからも、この可能性は高いと思われる。第二に、書写者は、親本としたテキストにある文字列を忠実に書写したにすぎないという可能性である。つまり、親本のテキストがすでに疑義のある状態であったということである。第三に、書写者が意図的にテキストを改変している可能性である。これらについては、他の写本群と比較しつつ調査すべき事柄である。

参考文献

浅川哲也・竹部歩美(二〇一四)『歴史的变化から理解する現代

日本語文法』おうふう

伊藤鉄也(二〇〇一)『源氏物語』の異本を読む 「鈴虫」の場

合』臨川書店

——(二〇〇二)『源氏物語本文の研究』おうふう

上田英代ほか共編(一九九四)『源氏物語語彙用例総索引』勉誠

社

上田正昭・西澤潤一・平山郁夫・三浦朱門監修(二〇〇一)『日

本人名大辞典』講談社

小田勝(二〇一五)『実例詳解古典文法総覧』(和泉書院)

北山谿太(一九五七)『源氏物語辞典』平凡社

源氏物語別本集成刊行会(二〇〇〇)『源氏物語別本集成第

一卷』桜楓社

此島正年(一九七三)『国語助動詞の研究 体系と歴史』桜楓社

財団法人静嘉堂編(一九八〇)『物語文学書集成 第二編(マイ

クファイルム)』雄松堂書店

財団法人静嘉堂編(一九八四)『静嘉堂文庫所蔵物語文学書集成

収録書總目録』雄松堂書店

竹部歩美(二〇一五)『国宝『源氏物語絵巻』詞書の仮名表記に

ついで―読解上の問題点と変体仮名の運用―『言語の研究』一

―(二〇一六)「国宝『源氏物語絵巻』詞書の語法小考―『源氏物語』との比較から―」『国語研究』七九

―(二〇一八a)「国冬本『源氏物語』の「柏木」と「鈴虫」の変体仮名の運用」『国際関係・比較文化研究』一六一

二
―(二〇一八b)「国冬本『源氏物語』に見られる使役と尊敬のサス―サ変動詞ス+助動詞サスに相当するサスについて」『言語の研究』四

―(二〇一九)「二つの伝西行筆『源氏物語』竹河の仮名表記」『国際関係・比較文化研究』一七―二

築島裕(一九七四)「国語史上の源氏物語」『源氏物語の研究』東京大学出版会

天理大学出版部(一九七八)『天理図書館善本草書和書之部第三十卷源氏物語諸本集二』八木書店

中川照将(二〇一五)『源氏物語大成』校異篇の歴史的意義『複数化する源氏物語(新時代への源氏学 七)』竹林舎

中村幸弘・大久保一男・碁石雅利(二〇〇二)『古典敬語詳説』右文書院

中村義雄(一九五四)「源氏物語絵巻の詞書について」『美術研究』一七四

―(一九五四)「源氏物語絵巻詞書 附原典諸本との異文校合」『美術研究』一七四

―(一九八二)『絵巻詞書の研究』角川書店
松村明編(一九六九)『古典語現代語助詞助動詞詳説』学燈社

吉田金彦(一九六二)「中古・近古における推量語「むず」「むとす」の用法」『国語と国文学』三九―三

付記
資料の翻刻の掲載を御許くださった静嘉堂文庫、並びに、天理大学附属天理図書館に記して感謝申しあげる。本稿は平成二八年度科学研究費補助金学術研究助成基金助成金(基盤研究C)による研究課題「『源氏物語』写本との比較から見た国宝『源氏物語絵巻』詞書の日本語学的研究」(課題番号16K02731)の研究成果の一部である。